

慈濟

ものがたり

ツーチー 2019年12月 276





●表見返し 文・證嚴法師
訳・濟運 撮影・黄筱哲

二〇一九年歲末祝福テーマ

誠正信実は大地の為 慈悲喜捨は平和の為

内に誠正信実を修めることで
心の雑草を取り除き、
大地と衆生を守ろう。
外に慈悲喜捨を実践することで、
春のそよ風のように
善意と善行を啓発しよう。



慈濟日本サイト

目次

【社論】	
「言葉」と「行動」の間に展開する 生命の新たな容貌	慈願／訳 4

【主題報道・静思語】

美と善が込められた生活と共にある言葉	維拉／訳 8
心を浄化するやさしい力	有田夏子／訳 14
中国語を学びながら人文をも学ぶ	惟明／訳 40
十八カ国の言葉と一つの道理	心嫻／訳 48

【国際慈善・モザンビーク】

荒野にこだまする声に耳を傾ける	慈願／訳 54
国境を超えてお袋の味を届ける	慈願／訳 62

【證嚴法師のお論し】

人心の浄化は善の流れから	慈願／訳 66
--------------	---------

【ボランティア人物誌】

貧困から抜け出し、豊かな人生を手に入れる	心嫻／訳 72
----------------------	---------

【特別報道 台湾台東】

台東「仁愛の家」	
多機能型介護療養住宅の入居開始	本諦、明陞／訳 80

【特別報道 ヨルダン】（下）

旅行者ではなく、家族のような親しみ	善耕／訳 90
-------------------	---------

【納履足跡】

完璧な人はいない	濟運／訳 103
----------	----------

慈濟大事記【十一月】	濟運／訳 107
------------	----------

表紙



證嚴法師の『静思語』は1989年に初めて上梓され、慈濟看護専門学校(今の慈濟科技大学)の開校式典では慈濟文化の象徴として生徒に贈呈された。その後、九歌出版社から出版され、今ではベストセラーとなっている。30年の間に18カ国語に訳され、今なお多くの人々の生活態度を良い方向へ導いている。(撮影・蕭耀華 美術設計・黄筱哲)

「言葉」と「行動」の間に展開する 生命の新たな容貌

アフリカのモザンビークは半年前、サイクロン・イダいの襲撃を受けていたが、現在の被災地は生気に溢れ、田畑や家屋は新しい姿を取り戻している。被災後、慈済が支援した農耕と建築用器具類が効用を発揮していると言える。首都から来た現地慈済ボランティアたちは、被災地に行つて現地でボランティアを養成し、若者が年寄りや弱者の住宅建設を手伝うよう指導している。

彼らが大きな心で奉仕するのは静思語の教えからきている。ここでは様々

な方言があるが、彼らは何人かの通訳を介して證嚴法師の法話を心から理解し、発心して行動に移すことで自分も他人も済度する善行を成し遂げている。「好い言葉は心に入れて用い、生活の中に根着かせるのが『善』です」という證嚴法師の言葉を立証している。

『静思語』は一九八九年に初出版されたが、出版業界の有識者として著名だった高信彊ガオシンジヤンが法師の「衆生の為に」という悲願に感服して法師の開示を編集したものである。そして慈済看護専門学校の開校式で来賓に贈られた。

当時は台湾経済が飛躍的な発展を遂げ、社会では消費至上の贅沢な気風が生まれ、社会的価値観は揺れ動き、乱れていた。二十年後、高信彊が亡くなった時、文芸界の人々が追悼の記念文章を出した。「彼は強い使命感を持ち、社会形態が変動する中で、社会問題に関心を示し、共同の理想を追求

することで、人心を善の方向に啓発していくことを自分の責任としていた」。

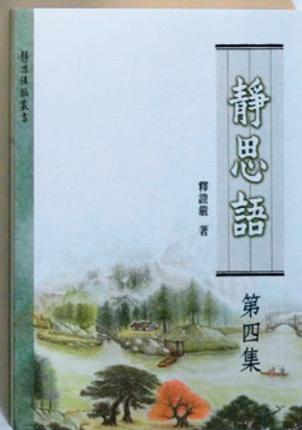
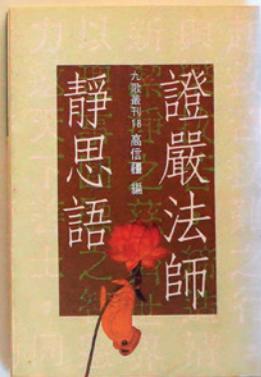
『静思語』は出版されるとベストセラーになった。分かりやすく洗練された言葉が、功利が取沙汰される世の中で自分を見失っていた人たちの心を安定させたのだった。『静思語』を読んで心を入れ替え、人生が変わったという話はよく聞く。出版して今年で三十年になり、十八の言語に訳され、販売部数は七百万冊以上を数える。

書籍以外に『静思語』は多様な方法で伝えられているが、慈済人の慈善行動により様々な国にもたらされている。それは生活上の指針となるだけでなく、それ以上に実践を通してより大きな力を生み出している。

「静思語教育」を押し進めた黄雅蘋^{ホアンヤピ}は台湾の小学校の先生だったが、彼女は教師と生徒の間に良い言葉や良い話が生まれるという善の循環を造り出すことができただけでなく、教師である自分が「静思語」の精神を深く理解してこそ真に模範となれることを体得したと話している。それ以外に一九八〇から九十年代以降に生まれた若者にとっては、「静思語」の歴史は長いが斬新に感じられ、混沌とした時には精神の支えになってくれる存在なのだという。

簡潔な言葉が心に聞き入れられて行動に移せば、自分や人に対して発揮する正のエネルギーは無限である。法師は『静思語』を生活で実践することの重要性を切実に訴えている。「口では良い言葉を話し、心で良いことを想い」、そして「身で良い事を行う」ことで自分が高まる。そして「言葉」と「行動」を通してその真の意義が得られた時、生命もまた「言葉」と「行動」の循環の中で新たな様相を呈し始めるのだ。（慈済月刊六三三期より）

證嚴法師
靜思語



「證嚴法師の『靜思語』」は1989年初めて世に出た。慈濟看護専門学校開校記念の贈答品として九歌出版社で出版されるとロングセラーとなった。2018年に第4巻を出版した靜思人文志業社から第5巻が、今年10月に出版されたばかりである。

(撮影・蕭耀華)

一 主題報道 一

美と善が込められた生活と共にある言葉

訳・維拉

靜思語

現実の人生から出発して日常生活に入り、実践により体得するもの…。『靜思語』は出版されてから三十年が経ち、十八の言語に訳されています。それは広い心と純粹な考えの美しさを真心込めた言葉で伝え、迷いを解くために役立つ心の辞典なのです。



静思語

出版から30年



静思語が出版されてから30年、
販売部数は70万冊以上、
出版は18カ国語版に及ぶ。

英語、フランス語、ドイツ語、韓国語、
日本語、中国語繁体字、中国語簡体字、
インドネシア語、ベトナム語、タイ語、
ロシア語、アラビア語、ヒンディー語、
スペイン語、イタリア語、マレーシア語、
タミル語、フィリピン語



実践と応用
静思語教育、静思語絵画、静思花道、静思茶道
推广と研究
受刑者に読まれている。旅館に置かれている。静思語通りができ、書画としてキャンパスを飾り、車用ステッカーが作られて街を走る。静思語をテーマにした修士及び博士論文は71篇、原著論文は45篇書かれている。

- 1989年9月17日 (上図右)
看護専門学校創立記念版が世に出る
- 1989年11月15日
九歌出版社出版 慈濟初めての市場流通書籍
(上図左)

静思人文 静思語錄シリーズ



静思ネット書房

心を浄化するやさしい力

文・慈濟期刊部『慈濟の歩み』書籍編集チーム 訳・有田夏子

今では街の至る所で静思語の言葉を見かけることができるが、それは三十年前の、分野の垣根を超えた出会いから始まった。作家であり出版者としてもよく知られていた高信疆ガウシンジヤンが慈濟のことを初めて知ったのは、一九八九年のことであった。證嚴法師の「真」と「常」のなかに、人の心に影響を与える力があることを見出した高信疆は、これらの知恵の言葉の数々を『静思語』としてまとめ、出版した。それから三十年、『静思語』はすでに十八カ国語版に出版され、世界の隅々まで影響を与えている。

一 九八九年九月十七日、慈濟看護専門学校の開校式典に参加した二人の来賓は一冊の本を手にしていった。證嚴法師の『静思語』である。これは、開校式典を主催した何國慶ホグクオチンが、慈濟文化の象徴として来賓達にプレゼントしたものであった。

慈濟委員であった何國慶が出資し、作家であり出版者としてもよく知られていた高信疆が編集責任者を務めた『静思語』はこの時、慈濟看護専門

●高信疆（右から4人目）は報道関係者や文化関係者の中から広く友人を招き、初めて慈濟を訪問した。1989年12月13日、高信疆と何國慶（1番右）は中国大陸出身の在米作家である劉寶雁（左から3人目）らと共に静思精舎を訪ね、證嚴法師と会見した。（写真提供・花蓮本部）



学校の開校を祝福するため記念版四万冊

が印刷された。それから一カ月後、更に九歌出版社からも出版され、慈済から世に出された初めての書籍となった。この本は発行から数カ月という短い間に、一九九〇年度台湾出版界における十大ベストセラーの内に数えられることとなった。

高信疆は「紙メディアの風雲児にして第一人者」の異名を持ち、またかつて作家の林清玄から「出版編集界の大將軍」と呼ばれた人物である。一九八九年三月に證嚴法師と会見してから九月の出版までわずか半年足らずで『静思語』はベストセラーになり、ロングセラーになり、のちに十数カ国語に翻訳されて世界中で

出版された。

平易な言葉 一字一字が宝物

中時晩報の社長であった高信疆は、台北市延平南路の実踐堂に入って行くまで、慈済の名誉理事懇親会がどのような会であるのか、全く理解していなかった。親友の何國慶からは、一度慈済へ来てみるようにと度々誘いを受けていた。彼は、自分が本当に理解していないものを宣伝したり、付き合ひのため表面的な文章で対処したりすることはないと言っていた。

彼には自分なりの堅持があった。かつ

て中國時報の別冊「人間」誌の編集責任者だった頃、ある作家が「花蓮に慈善事業にすぐれた比丘尼がいるので、報道してみてはいかがですか？」と尋ねた時、彼は少しも考えることなく、「私は宗教には関わらないことにしている」と答えた。

一九八九年三月四日、高信疆は新聞社から帰宅する途中、誰にも言わず慈済の活動会場へと入っていった。入り口でまぎ目にしたのは、中国服に身を包み、満面の笑顔をたたえた女性達だった。彼は彼女達から温かい中華包子パオズを受け取った。会場には多くの人々がいた。数人の女性達が同時に立ち上がって席を譲ってくれ、そのうちの一人が通りの階段に腰

掛けたので、彼は辞退し難くなった。

記者から編集長を経て社長になるまで、高信疆が担当した新聞や雑誌には、いづれも新しさや創造性があった。彼はジャーナリストとしての深い観察力を持ち、常に現実社会へ貢献し、社会的意義を作り出すような仕事をしてきた。だがこの時、客席に座っていた彼は、慈済が二十年余りで成し遂げた救済活動の数々に驚きを隠せなかった。

それから二日後の夜、彼は何國慶とともに台北市吉林路に台湾北部を行脚中の證嚴法師を訪ねた。宗教を信仰しない彼ではあったが、證嚴法師が幼少期に空襲を逃れた時のこと、養女となったこと、



▲2015年の歳末祝賀会にて、證嚴法師から慈濟人へ「祝福のお年玉」が贈られた。
(撮影・黃錦益)



その養父が突然他界したこと、台中は豊原の田舎で送った稲作生活のあれこれ、早熟な悟りが真理追求の道をひらいたことなどを、とうとうと語られるのに聞き入った。高信疆は、出家者は世間のことを論じないという自身の思い込みが徹底的に覆されたと感じた。

證嚴法師の言葉には、難しすぎて分かりにくいところはなかった。高信疆は、宗教家の「真」と「常」が、とても親しみやすいものだと感じた。これらの物語に、彼は目を輝かせた。彼は、ロシアの作家ドストエフスキーの名著『カラマーゾフの兄弟』に登場する東方正教会のゾシマ長老を思い出していた。

●一九九〇年一月、證嚴法師は『靜思語』初版の印税を歳末祝賀会の「祝福のお年玉」とすることを決められた。それが酒造りの酵母のような役割を担って人々に社会への貢献を促し、功德と智慧という両方の財を身につけられるようにと願われたのである。以来毎年「祝福のお年玉」の伝統が続いている。左下は1992年の、右下は2018年のそれである。(撮影・蕭耀華)

ゾシマは若い頃に従軍していたが、愚かな事をして後悔し、修道院へ入ることを決めた。恨みの心を克服した彼は、清んだ空気と瑞々しい草花こそが天の恵みであることを知り、生命溢れることの素晴らしさを悟った。ゾシマ長老はまるで鏡のように、人々の心の闇や空虚さを映し出し、彼らを導き、祝福を与える。彼は

亡くなる直前に来訪者と交わした会話の中で、数々の知恵に富んだ素晴らしい言葉を残した。

ゾシマ長老は小説家が描き出した虚構人物にすぎないと思っていた。だが、目の前にいる證嚴法師が、そのゾシマ長老に生き写しであることに高信疆は驚いていた。「現実世界にも、このような智者がいるのだ!」。その後、彼は人脈を通じて報道業界や文化人の中から友人を招き、慈濟を訪問した。一行には、劉賓雁、蘇曉康、聶花苓、李欧梵、柏楊といった作家達や、歴史学者である唐德剛教授も含まれていた。

高信疆の推薦により、中央日報、中国時

疆夫人である柯元馨の考え方も期せずして一致するものであった。

高信疆が證嚴法師に会見したあの日、別れの挨拶を告げる高信疆に、證嚴法師は『慈濟の教え』と『三十七道品(涅槃への三十七の修行法)』、『淨因三要』等の資料を贈った。これらを柯元馨が先に読んだ。「内容が素晴らしい!」。当時、時報出版社のマネジャーを務め、鋭い感性を持っていた彼女は、内容を再編集して出版することを提案した。

五月初旬、高信疆は新聞社を辞職したばかりの洪素貞に電話をかけ、慈濟のために一緒に何かしようと彼女を誘った。彼は、證嚴法師のために一冊の語録を出

報、聯合報、自由時報等の新聞社も、次々と花蓮に赴いて慈濟取材した。そのうちの一人、中央日報の特集ページ編集者であった洪素貞は、高信疆の紹介により四月九日に花蓮にて訪問インタビューを行い、「万頃の福田を万人で耕す」證嚴法師の慈濟世界」と題する一文を、四月十九日と二十日両日の中央日報で連載した。

論語にならった智慧の語録

読書家であった何國慶は、證嚴法師の言葉は智慧に富んでおり、丁寧に編集すれば、一般の人々も興味を持って読めるものになると考えた。この考えは、高信

版することを考えていた。

洪素貞は慈濟のインタビュー記事を書き終えた後も、感動冷めやらぬ気持ちでいた。ちょうど職業人生における空白の時期を過ごしていたこともあり、高信疆の依頼を受けることにした。中国文学を専攻していた彼女は、『論語』の形式にならってはどうかと提案した。高信疆の同意を得ると、すぐに資料の収集に取り掛かった。

何國慶、楊亮達をはじめとする慈濟委員の協力のもと、台北から十九名の委員チーム長を招いて数度にわたる会合を開き、證嚴法師が述べられた言葉のうち、彼らにとって一番役に立ったと思う言葉

を共有してもらった。その後、各委員チームから證嚴法師の言葉を五つずつ提示してもらった。また、洪素貞はベテランの委員達を訪問し、彼らが證嚴法師から直接受けた教えを遡って取材した。静思精舎に一週間泊まり込み、證嚴法師の講演記録や弟子達の日誌の研究を続けた。大海の中で針を拾うような根気のいる作業により、ついに一千余の言葉が選び出された。

こうした細かな編集作業は、高信疆が姿を表すまで続けられた。当時コンピュータなどはなかった。高信疆は資料を短冊状に切り、三時間も地面にしゃがみこんで、一つ一つ分類し、整理した。その様

子を間近に見た何國慶は、優秀な編集者は舞台裏での努力を欠かさないものだと言った。

編集が完成し、上下二巻とすることに決まった。上巻は『静思晨語』と題し、時間、慈悲、貪欲、因縁、修養と修行等に関する證嚴法師の言葉を集めた。下巻は『人間問答』と題し、高信疆夫妻が精舎で直接證嚴法師へ質問した内容をまとめたものであり、寛柔、責任、コミュニケーション、嫁姑、情愛を語った人事編と、信仰、仏教学、功德、因果等を語った宗教編からなる。

何國慶と高信疆は、書名を『静思語』とすることに決めた。李男氏が美術設計

を担い、表紙には奚淞氏の仏画を掲載した。編集責任者から美術設計までを当時一流の人物に依頼して出来上がった本は、簡素な中にも典雅な風格があるものになった。何國慶が出資して二万冊を印刷し、慈済看護専門学校の開校式典で来賓と縁を結ぶ物として贈られた。この本は慈済人の間ですぐに広まり、盛んに読まれるようになった。何國慶はすぐに二万冊を増刷して送り届けた。

「この本は、慈済の会員だけでなく、一般の人々にも読んでもらうべきだ」。このような考えは、高信疆と何國慶の共通認識だった。これまで仏法書、善書の多くは寄贈によることが多く、慈済

の出版物も市販されたことはなかった。『静思語』を市場で販売するため、何國慶と高信疆、そして中央日報編集長の王端正は三人で会議を開き話し合った。一九八九年十一月、『静思語』は九歌出版社から一般市場に向けて出版された。

「この度の刊行によって、この本が慈済人の覚行の指南として読まれるだけでなく、社会一般の縁ある人々に、生活の懇切丁寧で実行可能な一冊の辞典として、読まれるようになることを期待している」。高信疆は「出版の背景」の文中でそう述べた。

一九八七年、台湾では戒嚴令が解除され、数年のうちに大きな経済発展を遂げ



生活に根付いた人生指南

『静思語』は書店で飛ぶように売れた。九歌出版社の発行人である蔡文甫は、ツァイウェンフー證嚴法師との会見時に印税の入った厚みのある封筒を手渡した。證嚴法師はこの知恵の財産を、歳末祝福会における「祝福のお年玉」として、慈濟人と共有することを決められた。

「では法師から皆様にお年玉をお渡しします」。一九九〇年一月十八日、大晦日まであと八日となったこの日、證嚴法師は委員懇親会にて以下のように喜ばしく宣言された。「このお金は功德会のもではなく、基金のお金でもなく、私自身

だが、株式と不動産がバブルの一步手前まで上昇し、社会は不安に包まれた。『静思語』は、こうした人々の心の求めに応じるものだったのだろう、発売後わずか一週間のうちに二万冊が完売した。台湾全土における三十二の書店でベストセラー第一位となり、わずか二カ月で三十刷を重ね、印刷部数は六万冊に達した。

●今年4月、桃園の慈濟ボランティアは地域社会へ歩み寄り、商店街で静思語の言葉を共有した。「静思語の良い言葉を町に広めましょう」の活動は、2004年に台北文山区の慈濟人が発起した。これは、店主の同意のもと、店に静思語のポスターを貼ってもらう活動であり、今では台湾全土、そして海外の多くの国々へと広がっている。

(撮影・謝佳成)

のお金です。私がどこでお金を稼いだというのでしょうか？良い知らせがありません。『静思語』の印税のおかげで、今年私は私から皆さんにお年玉を配ることができまます！」。

『静思語』の印税によって、その後慈濟人が毎年の歳末に證嚴法師から受け取る「祝福のお年玉」が生まれた。證嚴法師は、慈濟人達がこれを酵母として、世俗の財を社会のために使うだけでなく、功德の財と知恵の財をも身につけて欲しいと考えた。

『静思語』の出版から五カ月後、一九九〇年四月十五日のこと、證嚴法師は委員懇親会の場で、昨日一人の青年から

受け取ったという手紙について話された。

「彼の手紙にはこうありました。『法師、私はあなたにお会いしたことはありませんが、あなたの『静思語』が私を救ってくれたことに感謝しています。私はある日、信用金庫を強盗しようと考えていました。その時、隣にあったバイクの上に『静思語』が置いてありました。手にとつて開いてみると、「善行をするのに一人たりとも欠けてはならない。悪行には一人たりとも加わってはならない。」との一文が目にとまりました。私は棒で一喝されたように、理性を取り戻しました。もしこのことがなければ、今この手紙を書いている時分、私はすでに自由の身で

はなかったでしょう』彼は、幼い頃から家庭が貧しく、生活が苦しい中で努力して高等教育を終え、兵役を終えた後も努力して仕事をしましたが、友人の保証人になり、その友人が夜逃げしたことで、四五〇万円の負債を負うことになったそうです。債権者が毎日取り立てに来て、行き場を失い、このような考えに及んだ時、幸いにも『静思語』を読み、ハツとして思い直し、恥ずかしくなったのだそうです」。

この住所の無い手紙は、證嚴法師の心を慰めた。「なんとという不思議な縁でしょう。この縁が無ければ、どんな結果になっていたことか。私はこの匿名の青

年を心から祝福します。光明ある未来に向かうことを祈ります！」。

『静思語』が人の心を救った例は、枚挙にいとまがない。

ある日、一人の男性が慈済の台北支部に入つて来た。彼は定期的に『静思語』を二十冊購入して人に贈っているが、重慶南路の書店では一度にこれほどの数を購入できないため、直接慈済の支部まで来たのだと言う。

なぜ毎回二十冊も買うのかといえば、彼は新聞で「逃走した妻への警告」が掲載されているのを見るたびに、掲載主に電話して子供はいるかと尋ねるのだと言う。もし子供がいるなら、子供の面倒を

よく見るように諭し、『静思語』を贈る。実は、『静思語』に出会う前、彼もこのような広告を出したことがあり、ずっと復讐ばかり考えていたそうだ。彼は、配偶者に不実を働いたことで婚姻が破綻したと自認しているが、その後も同居人に暴力を振るつたため、相手が幼い娘を連れて家出したのだった。長女を養わなければならぬのに仕事をする気になれず、頭の中は恨みで溢れ、耐え難い苦しみ味わつたのだという。

その時、近所の人が『静思語』をくれた。彼はこれを読んで冷静な気持ちになり、慈済人に助けを求めて導きを受け、ついに心を整え、新たな人生に向き合うこと



ができた。「私の家庭は、『静思語』に救われたのです!」。彼は『静思語』を購入し、この一冊の良薬を、同じ境遇に苦しむ人に贈ることにした。

当時、半月に一度発行されていた「慈濟道侶」では、毎号冒頭に静思語が一つ掲載されており、多くの人々がこの簡潔で良い言葉に目を引きつけられた。特に教育界の人々がしばしば引用し、人格教育の教材とすることが多かった。

台北で教師をしている慈濟委員の林慎リンジンはある日保護者からの電話を受けた。「林先生、娘は家に帰るといつも書き留めた『静思語』を私に見せてくれるのです。私は以前、主人と喧嘩して一、二カ月も

口をきかない事がありました。私はまるで武則天のように、家族に言うことを聞かせようとしていたのだと思います」。

その結果、家族に恐がられ、避けられ、彼女自身も苦しみを味わったそうだ。そんな時、娘が書き留めた言葉を見た。「他者を一つ許すごとに、幸福が一つ増える」、「良い言葉は口からハスの花が出るのに似ている。悪い言葉は口から毒へビが出るのに似ている」。この二つの良薬を服用し続けた結果、彼女は子供と話す際には励ましの言葉を使うようになり、また夫に対しても恨みを持たないようにし、家庭の雰囲気が大きく変わったのだそうだ。彼女が教師に電話をかけ、

お礼を言ったのはこういう訳であった。

十八カ国語に翻訳され、
世界中で発行される

『静思語』の誕生を支えた何國慶にも、この本の力を感じる出来事に出会った。彼はある時、商談相手と意見の相違が生じ、互いの声が次第に大きくなっていった。その時、電話が鳴った。彼が電話を済ませて席に戻ると、相手の態度が一変

●南投県中寮郷の社寮中学校の廊下で、学生達はどこでも心を養う良い言葉を目にする事ができる。台湾中部では、約六百校が校内に静思語を掲示しており、生徒達は校内環境から自然に学ぶことができる。(撮影・黄筱哲)

していた。テーブルの上にあった『静思語』の「道理はまっすぐ、態度は柔らかく」との言葉を見て、怒りが瞬時に消えたのだという。『静思語』によって二人の心は平穏を取り戻し、商談も順調に進んだ。

洪素貞は『静思語』を編集しながら、法師の言葉に含まれる深く豊かな力を感じ取っていた。人の心を癒し、善を呼び起こす力である。「宗教とはどこか遠いところにあるものではない。ここでは人

●慈濟ボランティアが台中の監獄で開催した静思語の読書会にて、収容者が活動の感想を記録しているところ。ボランティアは台中、屏東、宜蘭、花蓮等にある監獄を慰問し、前向きな良い言葉を共有した。(撮影・陳群誠)

間菩薩の価値が作られ、生活に根付いた仏法の信念が実践されているのだ」。洪素貞はのちに證嚴法師に帰依し、静原という法号を授かった。

「證嚴法師の話される言葉は、決して人を驚かすようなものではないにも関わらず、たった一言で人を夢から醒ますことができる」。高信疆は「編集にあたって」の文中で、「證嚴法師の話は、高尚で華やかな言葉を使わずとも、小さなところから真理を発見するものである。問答の中に大きな啓示が溢れている」と述べた。

「法師の救済行動の力は、観念に始まって、浅いところから深く入り、身近な問題



慈濟ものがたり 30

から人生哲学の問題へと導くものです」。高信疆は、證嚴法師の言葉は人生指南を与えるものだと考えた。日々の生活に根ざすそれらの生きた言葉にどれほどの人と、そして家庭が救われたか知れない。

『静思語』の完成前、王端正も筆をとっており、偉大さは平凡の中にあります。『静思語』には難しく読めないような用語は無いにも関わらず、一言一言が深く考えさせられるものです。分かりにくい仏教学の用語はありませんが、一字一字に仏の性質が込められています」と彼は考えた。

何國慶は当時、高信疆と王端正という報道界の先輩二人と『静思語』の出版について話し合った時のことを覚えている。経営者であった彼は、この本は必ず市場の評価を得ると確信しており、五十万部から百万部は売れると予測した。高信疆と王端正は大声で笑って言った。「何師兄、それは不可能ですよ。台湾の出版界では、二万部を売ればもうベストセラーなのです」と。

ところが『静思語』出版から一年のうちに、発行量は二十万冊に達し、高信疆と王端正の予想の十倍を超えた。二人は眼鏡がずり落ちそうになったことだろう。

高信疆のおかげで人口に膾炙する良書が誕生した。彼と證嚴法師との縁のおかげで、報道関係者や文化関係者が慈済に注目するようになったのである。高信疆が慈済に足を踏み入れたあの年、台湾が慈済を発見したのだと、何國慶は考えている。

● 現在『静思語』は既に十八カ国語版が刊行され、七百万冊を超えて販売されている。慈済教師懇親会の教師は、静思語教育を発展させ、良い言葉を国内外の学校に取り入れた。多くの子供たちが『静思語』を朗唱できるようになっただけでなく、その家族に影響を与えること

● ホテルの客室に『聖書』が置かれているのをよく見かけるが2005年より台湾では『静思語』を置くところも現れた。その後、ボランティアの推進によって、今では国内外で1400軒のホテルに設置され、旅人と善縁を結んでいる。

もあった。一言一言が精錬され、簡潔な仏法の言葉が街角や商店街に溢れ、いつでも人の心に清々しさを届けている。

過去三十年間、『静思語』は社会に対して、大いに善の影響を与えてきた。證嚴法師は、この本の誕生を支えた何國慶の功德は無量大であるとたたえられ、また人文志業には人心を浄化する力があるとの確信を強められた。「この本を読んだ全ての人が、心の自由を得られることを願っています」。『静思語』は證嚴法師が易しく分かりやすい言葉で、人生の道理の初心を説いたものである。この本が、より多くの人々の心と出会うことを願っている。(慈済月刊六三三五期より)



【静思語・修養編】

- ・大きな過ちは容易に反省できるが、些細な悪癖はなかなか改められない。
- ・心が美しければ、何を見ても嬉しくなる。
- ・相手の目の中に入るほど己を小さくし、心の中にまで入り込まなければならぬ。

【静思語・家庭編】

- ・母親の心で世の衆生を愛し、菩薩の智慧で子供を教育する。
- ・親孝行は人生で最も幸せなことである。
- ・夫婦の間柄はどちらが相手をより愛しているかが大事であり、相手より大きく出ることではない。

【静思語・実践編】

- ・ 人生は使用権こそあれ、所有権はない。
- ・ 自ら福田を耕せば、
自ずと福縁がもたらされる。
- ・ 途中で止まるのは、
目標にたどり着くよりも困難である。

カナダに移住

文・呉群芳（カナダ人文記録ボランティア） 訳・惟明

中国語を学びながら人文をも学ぶ

カナダ慈済人文学校は静思語の暗唱コンクールを行った。「太陽と両親の恩に感謝しよう。君子の度量は大きい、心の狭い人は怒りっぽい。」とある生徒が暗唱し、「私はカナダに住んでいる」と言って笑わせただけでなく、皆その静思語を覚えた。

台湾で優秀な教師に贈られる師鐸賞を受賞したことがある管恵美はこの笑い話に言及し、静思語は簡単で分かりやすく、日常生活で実践するのも難しくない言葉ですと語った。

一 一 児の母親であり教師でもあった管恵美は子供達の教育について考

え、伸び伸びと楽しく成長できる環境の中で学習できることを望み、一九九六年、

一家は憧れていた未知の国、カナダに移住し、長い移民生活が始まった。

未知の将来に直面しなければならぬ移住には大きな勇気が必要だった。当時の決定を振り返って管恵美は、「当時、慈済中学と慈済小学校はまだ創

●2016年カナダのサレー市にある慈済人文学校では教師節を祝った。当時の管恵美校長は教師達を祝福すると共に、保護者達に慈済人文学校の教育主旨を紹介した。（撮影・李瑞宸）



設されていませんでした。他にもっと良い選択肢があればこれほど重大な決定はしなかったでしょう」と言った。移住した時、彼女はまだ教職から退職していなかったため、六年間カナダと台湾を行き来していた。

彼女は花蓮の出身だが、台湾にいた時は慈済のことをあまりよく知らなかった。一九九九年の九二一大震災を経験してから慈済に出会い、知るようになった。しかし、縁はまだ成就せず、慈済の門をくぐることはなかった。

二〇〇二年に定年退職してからはカナダに来て家族と暮らすようになった。

親戚の紹介で、彼女は慈済カナダの支部長であった何國慶ホクノケイに会った。丁度その頃、慈済がブリテイッシュコロロンビア州 (British Columbia) のサレー市 (Surrey) に「サレー慈済人文学校」の設立を計画していた。何支部長は管恵美に教頭になってカナダに「慈済教師懇親会」を立ち上げてくれるよう要請した。

管恵美は何支部長に言われたことが忘れられなかった。当時、管恵美は「私はもう定年退職したし、教えることしか知りません」と何支部長に話すと、何支部長から「慈済では『定年退職』とは言わず、『進路転換』と言います。慈済の人

文学校では中国語を教えるだけでなく、『静思語』も教えるのです。挑戦してみませんか」と勧められたのだ。

カトリック信者である管恵美は異なる宗教の環境下では不便ではないかと一度は躊躇したが、思いも寄らずその一歩で、「慈済ボランティア」が彼女の余生の主な仕事となった。

静思語クラスは保護者の第一選択

静思語を授業に取り入れたことは、保護者が子供を慈済人文学校に通わせる要因となった。慈済が「人文学校」と称す

る理由は中国語を教えると同時に、子供たちに道徳教育、即ち「人格教育」をも教えているからである。

ロコミによって、華僑系だけでなく韓国系、インド系、そして地元の白人の親達までが中国語と道徳を身につけてほしいと願って子供を慈済人文学校に通わせているのである。

静思語の読解は子供の中国語教育の時間に影響をきたすのではないかと心配する保護者もいた。しかし、慈済の教育理念である「感謝、尊重、愛」を理解し、また子供の中国語能力が日増しに上達しただけでなく、学んだ静思語を日常生活

で実践していく姿を見て、その心配は和らいだ。中国語と道徳教育が相乗効果を発揮し、更なる良い結果をもたらしている」と歓迎された。長年の保護者達の支持が管恵美を元気づける原動力になっている。

「うちの子を『楽しい精進クラス』に参加させて下さった慈済人文学校の先生に感謝します。子供はここで学んだいろいろな智慧を生かして今後いかに行動すべきかを決めるようになると思います。あなた達は本当に功德無量です。ありがとうございます」。

「この懇談会の後、帰宅してから娘をハグしています。先生からの宿題だと言

えば納得するでしょう。本当ですよ！先生に言われたと言った方が余程効き目があります」。

「うちの子が静思語から受けた生活教育の影響には驚きました。例えばお兄さんと家事を押し付け合っている時、私が『多く実践すれば？』と訊くと、彼らは『それだけ得られ』と答えます。私がまた『少ししかしなければ』と聞くと、彼らは『失う方が大きい』と答えます。そして、三人で笑い出しました」。

保護者の見返りは、先生の最も大きな収穫でもある。今になって思い返せば、管恵美にとって測り知れない慰めになっている。

良い言葉を生活に取り入れれば 親子関係が和らぐ

当初、延々と続く海を渡って、娘二人をカナダに留学させたが、今はそれぞれが幸せな家庭を作り、いい仕事についている。「孫が初めて覚えた言葉は『三字経』ではなく、静思語でした。幼い子供のはっきりしない発音で静思語を言うのを聞きながら、家族は楽しい時間を過ごしました」と孫の子守りを楽しんでいる管恵美が笑いながら言った。

その頃、管恵美と子供たちは離れ離れの時が多かった。困らんの時間も短く、いつも静思語を触れ合いとして使い、子

供との距離を埋めていた。そして子供に母親が何をしているかを知らせることで、子供も両親の心遣いを理解し、物分りがよくなっただけでなく、自立できるようにになったそうだ。

静思語は単なる言葉であるだけではなく、本であって歌にもなるが、それよりも重要なのが生活態度の改善である。管恵美の記憶では、子供が最も受け入れ易くて覚え易い静思語は「怒りは一時の狂気」、「自分を過小評価してはならない。人は誰でも無限の可能性を秘めているのだから」、「心に愛があれば、誰からも愛される」、「良い言葉を口にし、善行し、正しい道を歩もう」などである。何故な



ら、簡単で分かり易く、軽く口ずさむと同時に、知らないうちに実行でき、家族にも影響を及ぼすからだ。

ある年、低学年の静思語暗唱コンクールがあったが、参加者した一人の子供が「太陽と両親の恩に感謝しよう。君子の度量は大きいが、心の狭い人は怒りっぽい」を誦じた時、「私はカナダに住んでいます」と付け加え、会場を大笑いさせただけでなく、人々はその静思語を覚えてしまった。静思語が人々の記憶に深く残れば、その教えは生活に密着したものになる。

「自分を過小評価する必要などないのです。何故なら人は無限の可能性を秘めているから」というのも彼女の座右の銘で、彼女自身気付いていない潜在能力を引き出してもらったと感じたことがある。慈濟手話を学んだり、レクリエーション活動で先頭に立ったり、慈濟の歌を歌う時、キャンプであっても配付活動であっても、益々よく理解できるようになり、活発に人と交流することによって慈濟の人文を広げている。慈濟に「進路を転換」した彼女の人生は輝いている。

(慈濟月刊六三五期より)

カナダ慈濟人文学校の紹介

1997年、慈濟カナダ支部は慈濟人文学校を2校設立した。西海岸のリッチモンド校と東海岸のトロント校である。今ではカナダ全土に8つの慈濟人文学校があり、1792名の生徒が通っている。毎週土曜日の午前中に3時間の授業が行われ、校内には愛のボランティアが先生と生徒の安全を見守っており、教師は典雅な制服に身を包んで模範を示している。授業の内容には中国語と『静思語』が融合されており、生徒がクラスで学んだことを日常生活に取り入れるよう啓発している。

●カナダ・北トロント慈濟人文学校で「静思語チャレンジ」活動が行われた。(撮影・丘啓源)

十八カ国の言葉と一つの道理

ごく簡単な言葉の中に深い意味が秘められている『静思語』を、如何にすればより多くの人の目に触れて理解してもらうことができるでしょうか。

心に十分な充実感が湧き上がるまでの翻訳のプロセスは、既に一つの心の工程なのです。

「自分」を過小評価してはならない、人は誰でも無限の可能性を秘めている。「一番見極め難いのは自分自身である」。「行動に移さないから難しい、足を踏み出さなければ、道は遠い」。簡潔で誰にでも分かるこれらの一字一句が、こ

の三十年来どれほどの人に影響を及ぼしたか計り知れません。アメリカの刑務所の受刑者、銀行強盗をたくらんでいたところで静思語が目にとまり、幸い寸前で考え直した台湾の若者、また人生を彷徨っていた大勢の人や、自分の存在価値に疑

問を抱く人、生きることを諦めようとしていた人等……。

文字は形があつてそれぞれ異なっていますが、意味は形がないのに通じるのです。『静思語』は適切な翻訳によって、異なる言語の読者にも共感を呼び、深い道理を感じてもらっています。しかし、それぞれ国の文化や人情が違つと、言葉遣いと理解も違つてきます。どうすれば適切に翻訳ができるのでしょうか。

慈済志業の報道を翻訳して二十五年になる慈済外国語チーム日本語組のボランティアである陳



植英さんは、『静思語』をはじめ慈済の日本語版出版物の翻訳者と校閲者でもあります。彼は日本語の例を挙げて説明しました、「同じ漢字であっても、意味が全く違うこともあるのです」。

一つの例は、日本の工場には「注意一秒、怪我一生」と書かれており、その「怪我」という二文字は、日本語では「負傷」の意味です。それは「一時の油断が一生の障害をもたらす」という意味です。翻訳する際に一般的な言葉でも再考する必要があるのに、まして簡単な文句であっても意味深い静思語を翻訳するのは、なおさら容易ではありません。静思語は

シンプルに見えますが、翻訳するのは極めて困難なことです」。

「簡潔な訳文で正確に深遠な意味を表現する必要があります」。

「意味を完全に理解した上で、日本語に書き直し、人々が理解できるようにしなければなりません」と陳植英さんは指摘しました。

仮に中国語の静思語が三行あるとしても、最初の翻訳者が七行または八行に訳した後、陳さんは翻訳チームと再び話し、文の構成を調整したり語句を選びながら四行ほどの簡潔で絶妙な文に仕上げています。「簡単且つ適切で分かりやす

く表現することが大事です。過剰に解釈するのはかえってよくありません」。

確かに、文章を簡単に要領よくまとめ、さらに「信、達、雅」に達するのが良い翻訳なのです。翻訳を一言で言うならば、「ジグソーパズル」にちよつと似ていると陳さんは言いました。「まず、翻訳する前に文章の構成を配置転換しながら翻訳する目標言語の『思考モード』で表現するのです」。

言葉は善念を広める媒介

過去三十年間、静思語はすでに十八カ

国の言葉で出版されています。世界でも話されている言語トップ十の「人口」と「影響力」を見ると、『静思語』はほとんどそれらの言語に翻訳されていることが分かります。

『静思語』のドイツ語版は二〇〇〇年に出版されましたが、その翻訳者ロスリさん (Gertraude Roth Li) は、ハワイ大学のドイツ系アメリカ人学者です。翻訳した当時、彼女はドイツ人が仏法に興味を持つようになってきたと感じていました。また、東西ドイツの統一によりさまざまな社会問題が生じたことで人々も心の安定を必要としている時代でした。

彼女は『静思語』の道理が一般のドイツ人の生活理念にとっても近いと気がついたそうです。

中国語に堪能な彼女は、まず中国語版の『静思語』を理解し、それから英語版を読みながら、ドイツ語の表現方法を考えました。「良い教師は、ごく簡単な言葉を用いて意味深い道理を伝えることができます。證嚴法師は教師としても大変優れた方だと私は思います」。

『静思語』英語版第三巻の翻訳者でアメリカ人ヘルマーさんも、『静思語』の翻訳プロセスは自分自身の鍛練でした。静思語のどれを取っても善の考え以外の何物

伝っていた時、アラブ世界の文化は特異性があるものの、実は『静思語』が説く多くの人生哲学がイスラム文化と適合するということに気づきました。

その気さえあれば、誰にでもできる

二十一年も前ですが、『講義』という雑誌が「四十二の代表的な中国の著作の中でこの一冊」を読者に尋ねた結果、證嚴法師の『静思語』が儒家の經典『論語』に次いで、二位に選ばれたのです。『静思語』は如何に人々から愛読され、共感を呼び、広められているかが分かります。

でもないからです」と認めています。彼はカトリック教徒ですが「愛に国境と宗教の別なし」という言葉に賛同しています。

ミャンマー語の翻訳者はミャンマー華僑の蘇金国^{スージンクオ}さんで、サイクロン・ナージス災害の後に慈濟ボランティアになりました。今年七十五歳の彼は「現地の農民が静思語を通して慈濟と證嚴法師に出会うのを見て、自分への励みになりました。静思語は短い言葉ですがその道理が人の心に届くのです」と言いました。

かつて国立政治大学のアラビア文学科で教鞭を取っていた利傳^{リジュエンテイエン}田さんは、アラビア語版の『静思語』の校閲を手

陳植英さんは、「年をとるにつれ、善行と親孝行は待ったなし」に気づくようになったことを認めています。『静思語』には抽象的な言葉はあまりなく、とても身近で実用的な智慧の語録であり、しかも、その気さえあれば誰でも実践できるので、迷いを解いてくれる実用的な生活の辞典と言えましょう。

翻訳を通して、そのような示唆に富んだ話と人を激励する言葉が、異なった言語の世界に広められています。それは證嚴法師の本意であるだけでなく、人々に幸せをもたらすものです。

(慈濟月刊六三五期より)



特別報道 モザンビーク

ボランティアの願力

荒野にこだまする 声に耳を傾ける

青年達は被災地での一カ月にもわたるテント生活の間、現地ボランティアが炊いたベニバナインゲンとカンランの料理を食べてきた。任務を終えて帰国する時、心に甦るのはモザンビークで過ごした日々だった。

◎文・張麗雲(台中文記録ボランティア)

撮影・蕭耀華 訳・慈願

四

月二日、自発的に参加した第一陣の慈済基金会宗教処の青年職員た

ちが、台湾から二日間の長距離飛行の末にモザンビークのベイラに到着した。その後、台湾、南アフリカ、オーストラリア、イギリスからの青年ボランティアたちが合流し、五十六日間にわたる災害支援の配付と慰問活動が繰り広げられた。

平均年齢が三十歳過ぎのこの青年たちは、昼間は一日中村々を回って調査と支援で忙しく、その食事は即席麺や即席飯に現地のおモロコシ粒と茄子があれば豪華な一食だった。夜はテントの中に蚊



●烈日のもとで支援物資を貰う行列の人々のために、高雄ボランティアの蔡雅純は現地ボランティアと共にテントを張った。

帳を吊るし、中で資料を整理して台湾へ送る。ホテル代を節約した分だけ、被災者の気持ちにより近く感じられると言う。皆、黒く日焼けして、まだ幼い面影が残っていたが、張佑平はチンヨウピンこのひと月で現地の住民と仲良くなり、現地人ボランティアの炊いた、大鍋にインゲンを煮てカイランを加えた昼食も食べた。「本当に美味しくて、故郷の味がしました。私はモザンビークが自分の国のように思え、ここが益々好きになりました」と言った。

来て当然

「南アフリカのヨハネスブルクはモザンビークから千三百キロも離れています。が、ビザなしで入国できるので、台湾のボランティアよりも私たちの方が支援に行くのには便利なのです」と、南アフリカ在住の蔡凱帆ツァイカイファンは家事

●調査、会議、調整、物資調達、輸送など、配付や施療活動の裏では言い尽くせない苦労がある。四月から被災地に駐在し始めたこの青年たちは頑なに任務を遂行した。

と事業を後回しにして、二カ月の間に四回も被災地に入って奉仕した。

ヨハネスブルクは、南アフリカの他の都市よりもベイラに近く、飛行機で一時間四十分の距離にある。ボランティアの黄騰緯ホァンテンドウエイは「ここは私たちとは縁の深い場所です。当然来るべきです」と言った。この二人の青年は浄水剤を被災地まで持って来ただけでなく、カメラとパソコンも持ち込んで、災害状況を詳細に記録していた。

黄騰緯は、遠くから来たボランティアは一時のカンフル剤であり、被災者の最も



困難な時に緊急支援はできるが、私たちは現地ボランティアは時間をかけて彼らを立ち上げさせ、さらに他人を助けられるようになるまで寄り添うのだと言った。

慈済基金会職員チゼンジーソンの陳祖淞は、「ニヤマハンダの村人は皆さん善良な方で、彼らに手伝いを頼めば、喜んで応じてくれます」と言った。慈済人は配付と同時に、ボランティアとしての訓練を受ける意志のある人を募ったところ、五百人余りの応募があった。そのうち二百人余りが合格して、「慈済ボランティアのベスト」を誇らしく着ることができた。活動期間中、



食事が準備されている場合もあれば、その一食が彼らの一日の食事になるかもしれないこともあった。

黄騰緯によると、数多くの住民にインタビューしたが、自分の年齢を知らない人が少なくなく、戸籍もなく、鏡で自分を見たこともないのである。「私はインスタントカメラで或るおばあさんの写真を撮って彼女に見せると、写真の人物が誰なのか分からなかったのです。自分の顔を知らないのです」。

彼は話しながら目を潤ませた。住民はこの生涯で一番近い大都会のベイラにも

行ったことがないだろう。まして外部の世界を知らないの言うまでもないのかもしれない。この貧困な地に生まれてから選択の余地がなかった彼らに、この先の慈済の援助を通して、人生が変わる機会がもたらされることを願った。

旅する意義

オーストラリアの盧威程ルイウエイチエンと歯科医の妻である盧以欣ルイイシンは、五月九日にベイラに着き、オーストラリアからの薬剤師である高敬堯ガウジンギョウと共に、施療活動の各種準備作

業と教育の仕事に投入した。

新竹のIT業界に勤めている陳璽チエンシ中は、蓄積していた有給休暇を使ってこの五月中旬の 아프리카 大型派遣団に参加した。彼は住民に対する交流活動の担当を任されたが、言葉が通じないのに気づき、うまく事が運ばなかった。そこで総務担当の二人と一緒に行動することにした。

●台湾の高雄から来た林維揚（左）、南アフリカヨハネスブルク在住の蔡凱帆は被災地に長期駐在している。大愛テレビの葉樹姍局長（中央）はマプト灌仏会現場で二人を激励した。

「総務は人より早く起き、治療が終わって皆がホテルへ引き上げた後に、引き続き翌日に治療チームが持つて行く必要物資を用意します。私はこの数日間で数多くのことを学びました」。陳璽中は自主的に総務を手伝うようになっただけでなく、慈済大学や専門学校の卒業生を中心にした行政チームを見て彼らの苦労を思い、心が痛んだ。任せられた仕事はやり遂げなければならぬ。「彼らに心配をかけず、事をうまく処理できれば、また仕事を任せてもらうことができ、彼らの手伝いをするができます」と言った。

貴重な体験ができて、台湾に戻っても感慨深いものがありました。食事の時に蠅を見かけず安心して食べられ、寝る時も蚊がうるさくないので安心して眠れます。水は慣れない味がしないので安心して飲め、トイレも水の心配がなく、安心して流せます。突然、生活は楽なものになりましたが、ブリキ屋根の下や大樹の下で、勉強を渴望する小学生や人込みの中から医師の診察を請う眼をした人を出します。緊急支援は一段落しても、中長期は続けなければならない、と法師は言っています。『教育』はアフリカを変える力であり、希望の道なのです」。

以前は娯楽に夢中だった陳璽中も今は休暇を無駄に過ごさず、「苦難の人を助けるという意義のある休暇になり、また来る機会があるよう自分を祝福しました」と言った。ボランティアになった縁を逃さず、「普段からまじめに仕事をして社長に認められ、仕事を代わってくれる人を見つければ、また、ボランティアをするチャンスは来ると思います」と言った。高雄から来た蔡雅純ツァイヤージュンと夫の林維揚リンウェイヤンは四月十一日、モザンビークに着き、いろいろな活動の準備を済ませてから五月下旬に帰国した。彼女はフェイスブックにこのように投稿した「ベイラではとても

アフリカで朝早くから夜遅くまで彼らが繰り広げたパワー溢れる活動の話しを聞いていると、インドの詩人タゴールの詩集『迷い鳥』が思い浮かぶ。「こだまが聞えた、山の谷と心の間から、孤独の鎌を以て荒野の魂を刈り取る。絶えず決裂を繰り返し、また幸福も繰り返し、遂にオアシスが砂漠で揺らめく……」。

彼らは慈済に出会い、さまざまな人生ストーリーの中から心の奥深くに自分を見出した。慈済は砂漠のオアシスに咲く災害後の蓮の花のように、住民にも自分にも希望をもたらしていた。

（慈済月刊六三二期より）



特別報道 モザンビーク

ボランティアの願力

国境を超えて お袋の味を届ける

ボランティアは被災地で日焼けして黒くなり皮膚が乾燥していたが、夜は調理の当番がある。南アフリカのママ慈済委員は見るに忍びなく、国境を超えて調理しに来た。

◎文・張美齡(台中文記録ボランティア)

撮影・蕭耀華 訳・慈願

モ

ザンビークは同じアフリカにある。「私たちはアフリカの慈済人です。被災地でひと月、南アフリカの青年たちを見てきましたが、皆真っ黒に日焼けして痩せているのです。もっと早く一緒に来るべきでした……」と南アフリカのママ慈済委員である張白玉は目頭を熱くした。

南アフリカの調査ボランティア蔡凱帆と黄騰緯は三月二十八日にモザンビークに来て支援を開始すると、毎日の出来事を写真と文章でSNSや慈済ネットワークに載せてきた。そして間もなくママ慈済委員に知られるところとなったのは、



●調理チームと黄騰緯(左から二人目)は皆、南アフリカから来て、協力し合って任務を果たした。(撮影・蔡凱帆)

二人が真っ黒に日焼けして痩せてしまい、夜は疲れきっているのに他のチームと順番で夕食を作らなければならず、忙しさから何日も同じ服を着たままであるといった有様だったからである。

そこで被災地の宿泊施設と交通事情が落ち着いたことを知ると、張白玉、許妙鈺、蔡秀麗、林昭汝の四人は直ちに五月十日、南アフリカのヨハネスブルクからモザンビークへ炊き出しに向かった。

調査ボランティアが借りていた事務室

とキッチンが狭く、ガスコンロ一つとフライパン一つ、三人か五人分の皿があるだけだったので、彼女たちはガスコンロをもう一つと鍋を二つなど必要な物を買った。支援に来るボランティアは益々増え、彼女たちはその小さな空間で、里芋粥や焼き麺、木耳の和え物、台湾風煮物等を含めた中国料理を作った。施療チームが到着すると、彼女たちは早朝四時にはホテルから一キロ離れたその狭いキッチンで百人分ほどの食事とお茶、デザートを用意した。

彼女たち調理チームは食材を浪費しない原則の下に、前日に買い出しに行った。

急いでポテトサラダを作った。

四人から成る調理チームはモザンビークに半月滞在した。自分たちも疲れてはいたが、異郷にあるボランティアたちが食べなれた自国の料理を喜んでくれたことが嬉しかったとチームの一員である林昭汝は語ってくれた。三十過ぎの息子が二人いる彼女は仕事を休んで調査チームの若者たちを世話しにやってきたのだ。「調査ボランティアの人たちは平均年齢が三十七歳だと聞きました。親心から食事の支度をしてあげただけです」。

レストランを経営したことのある許鈺の料理はバラエティに富んでいたが、

市場や商店では手振り身振りで食材や必要道具を買ったが、毎日何度も道に迷って目的地の商店にたどり着く有様だった。

五月二十一日、三回目の施療活動がベラ市カトリック大学で行われた。調理チームは百八十人分のランチが必要だと聞いて、一人にサラダパン一つ、ゆで卵一個、バナナ一本とジュース一缶を用意した。その他、おむすびとお菓子、コーヒー、冷たいお茶なども準備した。しかし、受け取りに来る行列が次第に長くなったと知るや否や、即席飯と即席麺を調理し、ほかにも外でパンを買って来て

もう一人の蔡秀麗は南アフリカの自宅では使用人が三食を作ってくれるので、あまり自分で料理を作らない。それでも施療会場に行った日は馴れない手つきで海苔巻きおむすびを作った。「診療に忙しい、食事をとる時間のないお医者さんたちへ体力補給のためにと持って行ってきました」と言った。

こんな場面もあった。青年ボランティアたちが彼女たちの作った弁当を持って仕事に出かけ、木陰で「お袋の味」を幸福そうに食べているのを見かけたのだ。その瞬間、この半月の苦労が何もかも報われて満たされた。(慈濟月刊六三二期より)



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・陳九熹

人心の浄化は善の流れから

人は行く先々で、汚染をもたらしている。

自然とこの世に危機をもたらしている。

人心の浄化に努めなくてはならない。

善の流れから始めるだけでなく、

法輪を天下に向けて回さなくてはならない。

人々に善の心があれば災難は遠のく。

養

成委員と慈誠隊（男性の慈濟委
員）の「ルーツを尋ねる精神研

修会」が始まり、各地のボランティア

が次々に精舎に帰ってきました。一人

一人にこれまでの人生のことを聞いて

いると、困難にぶつかることは避けて

通れなくても、正しい方向を見つけ、

この道を歩めば光は見えるものなのだ

と教えられます。こうして歩くだけで、

あらゆる煩惱や人と比較する心が変わ

り、心から脱皮して新しい人生を迎え、未来に向かって発心立願することができるとのことです。

真理に出会うのは困難なことですが、怠惰、傲慢心や信心喪失の時には、法を聞いても信じられなければ、仏法の門を潜ることは出来ません。『法華経・方便品』の中に、法華会上で、舍利弗尊者が大衆を代表して、仏に説法をお願いし、三請、三止（三度願い、三度とも断られた）後、仏陀が始めようとした時、そこにいた五千人が、以前説いたものと何ら違いはないと思ひ、最

高の礼をつくして退場しました。

『法華経・化城喩品』で述べているように、大衆が導師に従って険しい道を進み、真実の境地に近づいた頃、導師はそこに城を作り出して人々を休ませました。しかし、「歩いてきた道はこんなにも険しく、やつと化城に着いたが、この先まだ遠いのだろうか？それより引き返した方がいいのではないか」と思う人がいました。ガイドの導師は順序だてて説得しました「もう直ぐです。宝のある場所はもう近いのですよ」と励ましながら前進しました。

この時の境地は輝いているものです。それで私は常に、道を敷いて切り開くように言っているのです。慈濟は半世紀前に「竹筒歲月」を始めたことから道を敷き、困難ながらも一本の菩提大道を切り開きました。益々多くの慈誠と委員が私と共に平坦な道を敷いて、絶えず人間菩薩を招き入れ、四大志業と八大法印を成し遂げ、今では遍く世界の五大大陸に慈濟人がおります。

もしもこの人間の路を歩いてこなければ、菩薩のルールにたどり着くことはできませんでした。ですから皆さん

が慈濟との縁を大切にすることでなく、精進するよう願っています。研修とルーツ探訪が終わった後は、認証を受けることとなります。そして、自分の使命を理解して道心を堅いものにすべきであると『方便品』に言われているように、肝心な法の核心に迫った時に退席してはなりません。

私は新たに慈誠と委員になる人達に私自ら認証を授けることを大切に考えています。それは天下の使命を一人ひとりの肩に乗せ、人々にもまた責任を担ってもらふことになるのですから。

「二つの種子より無量が生じ、無量もまた一より生じる」と言われるように、認証を授ける任務を果たすため私も大変努力しており、日々自分を励まして、一歩ずつしっかりと歩いていきます。

今の私は、話しをするだけでも大変苦勞しますが、私には言い尽くせない慈濟人や慈濟の出来事があります。日々感謝しており、皆が慈濟精神を社会に広めて人々の苦痛を取り除き、また菩薩たちが衆生を濟度していることに感謝します。皆が初心を忘れることなく、あなたを慈濟に招き入れた人を忘れてはいけません。共に道を切り開き、敷

いた人間菩薩の道を大切にし、互いに感謝し、尊重し合うことで、この愛の力を代々に亘って伝えていきましょう。

気候の変動が心配になる。

最も恐ろしいのは心の台風であり、波風もないのに大災禍を引き起こす

十月中旬、台風十九号が猛烈な風と雨を伴って東日本を襲い、河川が決壊して被災後の復旧活動がとて大変なものになっています。同じ頃、米国とオーストラリアで重大な森林火災が発生し、甚大な災害をもたらしました。

天災は予期し難く、滔々たる風雨が押し寄せ、科学技術が如何に発達しても、人は天に勝ることはできません。気候の変動はもちろん気掛かりですが、最も恐ろしいのは心の台風です。風がなければ波は立たず、人心の偏りと情緒不安定による衝突が影響し、些細なことでも重大な災禍になりかねません。

世界各地で発生している天災や人災を見て、自分たちの平安に感謝すると同時に、警戒心を高めなくてはなりません。その実、この世の至るところに危機が隠れているのに、なぜ欲望と快

楽の中で彷徨っているのでしょうか？人の行く先々で汚染がもたらされ、人類の未来が心配されます。やはり、人心の浄化に努め、人心と人生の方向が偏ることなく、善の流れと法輪が絶えず世の中で回り続け、一人ひとりに善の心があれば、災難は遠のきます。

自ら身をもって励み、互いに広め合いい、一人が一つの家庭に影響を及ぼし、一つの家庭が地域に影響し、地域が社会に影響を与えれば、誰もが心穏やかになり、日々社会に幸福をもたらすことができます。皆さんの精進を祝福しています。（慈濟月刊六三六期より）

貧困から抜け出し、豊かな人生を手に入れる

幼い頃、母子家庭の貧しい日々は邱碧琬の表情を暗いものにしていました。中学校の先生は「布施する」ことを教え、その言葉で彼女の人生は変わりました。

その日、台中静思堂では邱碧琬が竹筒を持って会場でケア世帯に愛の募金を募りました。「かつて私もこのような経験をしたことがあります。幼い頃ケア世帯の座席に座っていた時、心の中では劣等感や無力感を感じていました。

しかし、時間が経って成長するにつれて心の持ちようが変わり、感謝するようになりました」。

二〇一八年慈済ボランティアの養成講座に参加した邱碧琬は、微笑を浮かべていても、眉間にしわを寄せてしまうのでし

た。それは彼女が小学校三年生の時から表情で、ボランティアになり、大愛ママになってから、ようやく笑顔で人と接することができるようになりました。一つ一つ試練を乗り越えていったのです。

変貌した幼年期の温かい記憶

邱碧琬は山に囲まれた南投県国姓郷福龜村に生まれました。以前は平穏な家庭でしたが、父親が三十五歳の年に交通事故で亡くなり、母親も慢性関節リウマチを患ってからは、母と娘三人の生活は苦境に立たされました。

母親は夫の借金を返済するためにあちこちで借金し、レストランでウェイトレ

スと食器洗い、清掃などをして懸命に働いて一家を養いました。姉妹三人も家事はもちろんのこと、内職をしたり、建築現場でレンガを運んだりして、わずかな収入を得て家計を助けました。

彼女の叔母は、小学生の三人姉妹をかわいそうに思い、面識のある慈済ボランティアの徐瑞宏シュヱイホウに話しました。徐瑞宏は埔里から国姓郷の邱家を訪ね、未亡人の母親と子どもたちの苦境を知り、邱家を長期ケア世帯に認定しました。慈済が毎月生活補助金を支給することになったほか、彼は自ら近所の米屋に月一袋のお米を邱家に届けるよう依頼しました。

徐瑞宏は毎月邱家を訪ねました。姉妹三人はいつもの「ブーブー」というオー

トバイの音を聞くと、「おじさん、こんにちは！」と大喜びで迎えるので、長旅の疲れも吹き飛んだそうです。

慈済のケア世帯になってから、姉妹三人は年越しを楽しみにするようになりました。暮れに行われる慈済の歳末配付です。日用品のだけでなく服の配付もあり、子どもたちのサイズにあった清潔な古着が届けられたのです。「もらった服を姉と一緒に身につけた時の嬉しさや感激はいつまでも忘れられません」と言いました。

邱碧琬は昔のことを語り続けました。当時、毎月の生活補助金は花蓮の慈済本部から郵送されて来ましたが、それと一緒に『慈済月刊』が添えてありました。



月刊の内容は、邱家と同じようなケア世帯の情報だけでなく、ボランティアのストーリーもありました。忘れられないのは、人々からの愛の献金を詳しく記載していたことです。「科学技術が発達していなかった時代にもかかわらず、慈済は全ての浄財の会計を公開していました」。

その時期、町役場の協力を得て、邱家は低所得者として認定され、子どもたちの学費は免除になりましたが、生活はまだまだ慈済の補助に頼っていました。子どもたちは人々からの愛の支えを大切に、向上心をもって定時制高校に進み、日中はアルバイトをしました。

彼女は二年制の専門学校までの学費や生活費を自分自身で稼ぎました。邱家の

収入が安定した後、母親は慈済の支援を辞退しました。

中学校の担任の先生は、生活が苦しくても、前向きで成績も優秀な彼女に奨学金を申請し、塾にも無料で通えるようにしました。塾の張先生の励ましの言葉が、彼女の人生にとって大きな転機となりました。「人生では誰もが苦難に出遭うものです。肝心なのは、貧困を力に変えて頑張ることです。そして施す心を忘れなければ、そこから抜け出すことができるのです」。

●小さい頃、慈済の支援を受けた邱碧琬は、今、人助けするボランティアとなり、社会に恩返しをしている。(撮影・陳静玫)

先生の言葉を胸に、彼女は「いつか必ず貧困から抜け出せる！」と自分に言い聞かせました。布施する機会があれば、たとえ僅かなお金しか持っていないなくても、それを必要としている人に与えました。

困難に出会ったら、
先ず自分を変えよう

結婚してからは台中の烏日に定住しました。息子を出産した後に臍帯血を慈済骨髓幹細胞センターに寄贈したことで慈済との縁が続き、ボランティアの呂閃リネンが度々彼女を慈済の活動に誘いました。

二〇一三年、「大愛ママ」コースに参加すると、親子成長クラスで世話役など

を務めました。「一番嬉しいのは、子どもと一緒に親子成長クラスに参加し、遊びや劇を通して子どもの本音が聴けるようになったことです。包容の心が生まれ、親子間にはや一方的な説教ではなく、話し合いと分かち合いができるようになりました」。

成長の喜びは智慧を開くのです。彼女は親子クラスの内容に充実感を覚え、慈済について更に理解を深めると共に自らの体験を話すことで苦難に喘ぐ人を励まし、勇敢に歩み続けたいと思いました。そこで二〇一八年、慈済委員の養成講座に参加しました。

ボランティアの活動で忙しくなった彼女に夫は「お前は時間を無駄にしている。

働いてお金を稼いだ方が賢明ではないのか？」と小言を言いました。夫の言葉を聞いた時、彼女はちよつと戸惑いましたが、気持ちを落ち着かせてから次のように答えました。「奉仕に時間をたくさん費やしているけれど、私が得たものはそれ以上なのです！」。

ボランティアとしての困難はふいに訪れます。ある日、歳末祝福会前に経典劇のリハーサルした時、終わったのはすでに夜の十時でした。家に帰ると夫がドアをロックしていたので、子どもたちに助けを求めてようやく家に入ることができました。子どもたちは落ち込んでしまった彼女に、「私たちは母さんを応援しているよ」と慰めました。

彼女は證嚴法師のお諭しを聞いて、自分を変えれば夫も認めてくれることに気づきました。それからは家族の世話を大切にして、理屈を通そうとせず、優しく語り掛けるように努めました。夫は次第に「ボランティアをするならば、家事をきちんとしてからにし、また、帰宅時間をちゃんと決めれば、文句は言わないよ」と約束してくれるようになりました。

養成講座に参加するには家族の理解と同意がなければなりません。夫が時に難題を言いつけても、柔和な態度と声音に変えてからは、ボランティアの道がより歩きやすくなりました。早朝に「法の薫りに浸る」活動に行くために、前の晩に、翌朝の朝ごはんの要望を家族にきいて置



くのです。そうすれば、朝食の準備に手間取らず、時間を把握できるのです。「菩薩道を歩むのは自分で選択したのだから、堅い意志で進もう」と自分に言い聞かせています。

母親に恩返しし、社会の役に立つ

母親は晩年、国姓郷の実家に一人で住んでいました。彼女は烏日に一緒に住むよう頼みましたが、お年寄りには住み慣れた田舎の環境がよかったです。母親は自立して生活できなくなつてから、老人ホームに入ることを選びました。

二〇一二年大晦日の午後、母親の訃報が入りました。彼女はしばらくぼうぜん

として受け入れることができませんでした。二日前に母親と電話で話したばかりで、旧正月の三日に会いに行く約束したのです……。母の臨終前に別れを告げ、謝罪と感謝、愛の気持ちを表せなかったことに、自責の念に駆られました。

『父母恩重難報経』の經典劇で、このような台詞があります。「父母の白髪は誰のために増えたのか、両親が悲しそうな顔をしているのはなぜか？世の親心はみな同じであろう……。親の恩は山ほど重いという分かり易くも深い道理の経文を一字一句と唱えると、涙が溢れて止まらなくなりました。彼女は経文を唱え、写経することで母親に恩返しできることを願っています。

「私たちが困っていた時に手を差し伸べてくれた人たちことを忘れてはいけません。人から受けたどんな些細な恩も、湧き出る泉のように返さなければなりません」。母親の言いつけを胸に、邱碧琬は既に心の拠り所を見つけ、その方向にまっすぐに進んでいます。彼女のように心の重荷を一つ一つ捨ててゆけば、いつの間にか貧困から抜け出し、豊かな人生を手に入れることができるでしょう。

（慈濟月刊六三二期より）

●台中靜思堂で「中部古参委員の里帰り」活動が行われ、邱碧琬（右）は当時、自分の一家に寄り添って苦難を乗り越えさせてくれたボランティアの徐瑞宏（左）と再会した。（提供・邱碧琬）

【特別報道】

台東「仁愛の家」

多機能型介護療養住宅の入居開始

老いてケアを受ける 慈済の建設支援

文・林素月（台東人文記録ボランティア）
撮影・蕭耀華 訳・本諦&明陸



台東仁愛の家「互愛樓」は1年半の建築工期を経て、6月30日に入居式が行われた。来賓はそのゆつたりした年長者にとって住みやすい環境を見て喜んだ。（撮影・陳信安）

台東の「仁愛の家」は県政府の紹介を通じて、一人暮らしや低収入、心身障害の高齢者を主なケア対象にしています。そのケアの質は良いのですが、部屋が狭いのでこれ以上入居者を受け入れることはできないため、慈済は多機能型介護療養住宅の建設を支援し、入居者にゆつたりくつろげるリビングやリハビリのできる環境を提供しました。

●60年近い歴史がある台東仁愛の家は、建物が老朽化し、全体的にも手狭であったため、これ以上理想的な環境を提供できなくなっていた。(撮影・劉文瑞)



す

でに高齢化社会に突入した台湾ですが、台東は高齢化が最も著しい地域です。二〇一八年十二月の統計によると、高齢者人口は三万五千人余りに上り、県人口の十六パーセントを占め、全台湾の平均値を超えました。

高齢化に伴う生理機能の低下、能力障害、慢性病及び事故などによる心身機能障害を持つ人の割合が増え、老人ホームや介護ホームを含めた長期ケア施設の需要も増えています。

「仁愛の家」に住んでいる一人のお爺さんは、「昔は子供を育てて、自分が年を取ったら子供にケアの義務を果しても

らおうと思っていたのですが、現在の社会では家庭観念が大きく変化し、子供にもそれぞれの家庭事情があるため、そういう考え方はもはや通用しなくなりまして」とため息交じりに言いました。「幸いにも幾つかの慈善団体が我々のような年寄りを引き取り、二十四時間ケアによって安心して過ごせる場所があり、歳をとっても尊厳を持って生きていくことができるのです」。

高齢者をケアして六十年

台東は台湾の東部に位置し、太平洋に

面して多くの山に囲まれ、住民の民族も様々です。社会の経済面から見ると、農業が主体の台東は、台湾において長らく収入と寿命が最も低い県でした。

台東市にある仁愛の家は一九六〇年に創設され、最初は「私立台東救済院」でしたが、一九八九年に「仁愛の家」に改名されました。主任である林鴻祺さんによると「仁愛の家」の住民は延べ千人以上で、二十年以上や十年以上住んでいた人も何人かいたそうです。

「仁愛の家」が建てられてから六十年近くになりますが、「慈善」の宗旨に基づき、身寄りの無い老人や心身障害者を

受け入れていきます。中でも低収入の住民は七十パーセントを占めており、先住民の占める割合は四十%近くになります。政府の許可を得たベッド数は百十九床ですが、近年平均の入居者数は百十五人に達し、長期的に満員状態になっています。

「仁愛の家」と慈済の縁は十三年前に、ボランティアがホームで高齢者に付き添うことから始まりました。時には慈済の紹介で長期ケア対象者を受け入れてもらうこともありました。ボランティアの王武弘さんは、「ホームは心身障害者にケアを提供しています。輝かしい過去を保持していたのに事故に遭い、心身ともに

苦しんでいる人もいましたが、慈済ボランティアは彼らの生活に寄り添い、笑顔と慰藉に満ちるようになりました」。

二〇一五年、慈済基金会は「仁愛の家」が手狭になっていったことを知り、入居者が快適に暮らせる場所を提供するために、多機能型介護療養住宅の建設を決め

ました。それは慈済が創設されて五十三年で初めて民間の慈善機構を支援したケースです。

二〇一八年一月八日から工事がスタートしました。台東の黄健庭県長は式典で、「県内には十三カ所の老人福祉機構があり、総ベッド数は七百三十床で、利用率

慈済台東の慈善大記事

○ 台風モラコットとネパータックの被害に対し、被災者への緊急支援を行った。

○ 「防災希望プロジェクト」により9カ所の老朽化した校舎を再建した。

○ 台風メランティの被害に対し、大武郷愛國蒲集落に恒久住宅を建設した。

○ 「仁愛の家」で新たに施設を建設した。



は八十五%を超えているため、二、三年内に満員になると予想され、ベッド数を増やすことは必須となるでしょう。仁愛の家の増設により県内のベッド数は八十床増えることになり、「仁愛の家」のみならず、台東県全体の老人ケアで大きく役立ちます」と述べました。

台東「仁愛の家」の三代目社長である李壬癸さんは、長年台東で事業に奮闘し、成功した後は感謝の気持

●2018年1月から、台東仁愛の家での食事は菜食に変更、慈濟ボランティアが入居者に食事のお膳を運んでいた。(撮影・劉文瑞)

ちでボランティアに力を入れ、地方において貧困者や弱者を助けて来ました。三年前に社長に就任した後、様々な業務を積極的に推し進め、慈濟ボランティアが

年長者をケアできるよう調整したり、祈福会などの活動を行って来ました。更に一昨年は理事達を説得して、ホーム内の食事を菜食にするよう推し薦め、

二〇一八年一月三十一日からは三食全て菜食を提供するようになり、台湾で初めて菜食養護ホームとなりました。

将来も「仁愛の家」はより整ったサービスを提供し、慈濟ボランティアも定期的なケアを行い、愛でてホームの暮らしに寄り添い続けます。

(慈濟月刊六三三期より)

建築の特色

生活、リハビリ、静養に適した多機能施設

「仁愛の家」の多機能型介護療養住宅は、一階に視聴室、レトロ調の回廊、ブツ

クカフェ、談話室、リハビリテーション室、食堂、キッチン、会議室及び事務所



その他、消防面でも考慮されており、ベランダが非難経路になり、全ての部屋の窓には自動排煙装置が取り付けられている。

新しい施設は病院と同じ耐震設計を採用し、余裕のある空間を確保しているため、地域の緊急避難所として必要に応じた緊急災害非難センターになることができる。（慈済月刊六三三期より）

●新しい多機能型介護療養住宅には、広い活動センターがある。今後、施設内の高齢者と近隣の民衆との交流場所として便利に使用できる。



があり、二階と三階は養護施設になっており、ベッドルームとラウンジが設けられている。

中でも特に注意しているのが、入居者間の相互感染で、感染症対策として感染経路を制御できる設計で、住民により良い感染防止施設になっている。

●多機能型介護療養住宅は高齢者や行動の不自由な人のことを考えて3階建てに設計され、明るくて視野が開けたものになっている。

旅行者ではなく、家族のような親しみ

水草の豊かな美しい台湾を出発して万里を飛行し、初めて中東にたどり着いた。チームが向かった先はヨルダンのベドウィン族である——アラビア語では砂漠に住んでいる人々を意味する。私たちは荒野でコップ一杯の水とひとつの大きなパイを共に味わい、人生の同じ時間を分かち合った。

◎文・林玲俐（台中人文記録ボランティア）撮影・王瑾 訳・善耕

作

家アラン・ド・ボトンの「旅する哲学・大人のための旅行術」に

「旅は思索の助産婦である。……目で見ているものと頭の中で考えていること

の間には奇妙なつながりがある。それは思考である。大きなことを考えるには大きな景色が必要な場合があり、それに対して新しいアイデアには新しい

場所が必要な場合がある。風景の移り変わりを見ていると、繰り返し考えていたことが定着しやすくなり、すぐに消え失せない」とある。

この一編は私たちはヨルダンに旅行した時の話である。目的地は世界の七不思議の一つであるペトラの古代都市だろうか？そう、とても近い所だ。つまり、アラビア渓谷の東側に隠れるように位置する狭い峡谷で、その景色は絶景だ。ワ

●ボランティアは配付のためにワディ・フェナンに来た。みんなはシングルマザー・ララの草葺小屋の下に座っていた。ベドウィンの一貫したおもてなしを受けて彼女の子供たちが持ってきたアラビア風のコーヒーと紅茶をすすった。



デイ・フェナンと呼ばれているその土地だが、そこに住む原住民は非常に貧しい生活を送っている。

最初の夜に泊まったベドウインのテントのことを話さなければならぬ。次の夜の砂漠で起きた砂嵐のことを続けていだろうか？またこの場所は映画「アラビアのローレンス」の中で、ラクダに乗ったベドウインの戦士がワディラム砂漠を渡り、オスマン・トルコの軍隊を打ち負かした都市でもあるのだ。

これは想像の砂漠のツアーグループのことではなく、慈済ヨルダン支部が今年の断食月に救援物資を配付するために、

苦難を乗り越えてヨルダン南部へたどり着いた旅であった。

私たちはアンマンを出発して一路南に向い、三日間でアブ・アシヤ、タラフ、ワディ・フェナンを訪れた。そして貧しいベドウイン族のために準備した米、砂糖、油、ヒラマメ、茶、ナツメヤシ、ナツメソース、ごまペーストなどの救援物資を二百五十世帯に贈った。

一杯の水

慈済と「ワディ・フェナン」の関係は二〇〇二年にさかのぼる。ハッサン王子

の次女であるスマヤ王女が貧しい人々を訪ねるためにここに来た。彼女は帰ってくると陳秋華師兄に電話をかけ、「あそこの人々はとても貧しいのです！私の運転手が連れて行きますから見に行ってもらえませんか？」と涙ながらに訴えた。その三日後に陳秋華は濟仁師兄と共にここにやって来て、地元の人々の苦しみを目の当たりにし、今は支援活動を始めて十七年目になる。

五月四日にワディ・フェナンにある合同学校で配付を行った時、私はファティマに会った。彼女は頭から全身をすっぽり覆う黒い衣装を身にとって、た

だ奥深い両目を露出させていた。誰かがイスラム教徒の女性の写真を撮影することは基本的に禁止だと私に言った。私の好奇心はまだ強かったが、やむなくカメラを置いた。

ファティマの目は善意を示して、私にうなずいて振り向き、広場を背にして、私が正面から撮影してもいいことを示してくれた。私は彼女が何を意味するのか理解していた。彼女の家族の男性がそれを見ない限り、それは問題ではないのだ。私は彼女の写真を撮って、彼女はアラビア語を話し、私は中国語を話し、私たちは問題なくコミュニケーションを取って



いた。また、私は彼女が救援物資を受け取ったあと、彼女に付き添って帰宅することができると言った。

ファティマは二十五キロの救援物資を受け取り、私は彼女を手伝って一緒に家まで同行した。一頭の羊が近づいて、救援物資が入ったビニール袋をかんだのでファティマは羊を手で叩いた。まるで自分の子供をしつけているかのようで、私に向かって恥ずかしそうに微笑んだ。

彼女のテントに入って周りを見回し、

●ワディ・フェナンに住んでいる155世帯は豊富な救援物資を受け取り、温かく断食月を過ごした。

私は頭を使って、彼女が持ち帰った物資をどこに置くか考えた？ というのはこの家には家具が一つもなかったからだ。私たちの世界では、米はお米櫃に入れ、砂糖は缶に入れ、ごまペーストは冷蔵庫に入れるが、彼女のテントの中でそのようなやり方は必要なかった。もともと何もなく今持ち帰った物だけなのだ。今日配付された白米五キロは十人家族だと一週間で食べ終わるので、どこに置いてもかまわないのだ。

この時、彼女の隣人が駆け寄って、私にコーヒーかお茶が欲しいですかと聞いた？ 私は微笑んで、彼女の熱意に感謝した。ファティマの「リビングルーム」は

テントのすぐ外にあって、四本の棒で組み立てられた草の小屋だった。草小屋の上部は以前の配付現場に残された段ボール箱で覆われており、そこに干し草が無造作に積み上げられている。粗末過ぎるが、かんかん照り付ける太陽を遮ることがができる。ファティマは私に座ってくださいと言った。

私は陳秋華師兄が言ったことを思い出した。それは救援物資をビニール袋に入れて配付することは環境にやさしくないが、しかし人々がそれを家に持ち帰ったあと、服を中に入れて吊るすので、防塵になり実際はとても役に立っているという話しだ。

午前中日差しにさらされた後、手作りの草葺の小屋に座るのは本当に涼しく快適だった。ファティマはカップを一つ取り出し、少量の水でゆすいで、つまり洗って、そして慎重に水を注いで私に手渡してくれた。

その瞬間、私はとても感動した。私は自分のコップを取り出し、彼女に「ありますよ！」と言って、そして彼女にこのコップの水を手渡した。それを彼女は喜んで飲み干した。これは彼女にとって午前中で初めて飲む一口の水に違いない。彼女の優しさと寛大さが甘い泉となって私の心田に流れこむような気がした。

の温度は非常に高く、すべての岩は大きなパイを焼くのに十分なほど熱くなっている。もしも学校に行く時、靴がなかったら、裸足でどうやって砂漠を通り抜けるのだろうか？」と問いかけたかった。シングルマザーのララは谷に住んでおり、七人の子供が生まれた後、夫は家に帰らなくなった。彼女はどうすればいいのだろうか？ 子供たちはどこに勉学の道を求めたらよいのだろうか？

ララの長女であるタハナイは慈濟奨学金によって、昨年大学を卒業し、今では良い人に嫁いでいる。二番目の子であるモハマドも十三歳から慈濟奨学金によつ

ひとつの大きなパイ

配付の現場では、多くの子供が裸足だった。一九六〇年代に生まれた私にとって子供の裸足は見慣れないものではなかった。当時、台湾の田舎では暑さ対策として多くの池で牛を洗い、子供たちが水遊びをしていた。しかし、ここはそうではなく、干上がった谷に近づくとも黄砂だけでなく、多くの砂利が足の裏に当たる。

靴を履いていない子供がたくさんいるのを見て、私は「何の目印も草もない所で羊を放牧する親愛なる子たちは、どこへ羊たちを追って行くのだろうか？ 砂漠

て、大学に進学した。彼は「卒業した後、私は故郷に戻って教員になるつもりだ」と言った。

彼らにはまだ弟がいる。彼は黒い肌、ほりの深い顔、波状の巻き毛がある。彼は兄弟と同じ奨学金を受けた。もし学校に行けなければ干上がった谷で他のベドウィンのように、裸足で羊とロバを駆って荒れ地をそぞろ歩きすることになる。一生を通して干上がった谷から出る事が叶わず遊牧民の貧しい宿命から抜け出すことができないのだ。

今日の配付では、母親ララが四人の子供を連れて手伝いに来てくれた。配付を



終えた後、私たちは一緒に救援物資を持って、彼女に付き添って帰宅した。同じ様にララには露天の貴賓席があつて、みんながこの草葺の小屋の中に座つて、ベドウィンの一貫したおもてなしを受けた。私たちは彼女の子供たちが持つてきたアラビア風のコーヒーと紅茶をすすりながら、陳秋華師兄の話に耳を傾けていた。この子供たちの学業支援がどのように始められたのかを詳しく話してくれたのだ。

「ここにいと自分の家族を見ているような気になります。彼らがまだ小さい頃から今までずっと見てきましたか

ら。いい大人になりましたね」陳秋華はタハナイが大学に上がる当時を思い出した。彼は母親に「どれくらいのお金を彼女にあげましたか」と尋ねた。「私は彼女に十二JD（ヨルダン・ディナール、約一千七百円）を与えました」「十二JDは交通費ですか」陳秋華は再び尋ねた。「一週間の交通費と食事代です」「どうやって暮らすのですか」「娘はまだ二JDを残して帰ってきましたよ」

これは陳秋華に大きな衝撃を与えた！ここでの習慣としてはチップを与える人もいた。ある人は一回で少なくとも十J

Dを与えた。

ボランティアはタハナイのためコンピューターを募集した。陳秋華と慈愛師姉は一緒に彼女に会いに学校へ行った。彼女の寮では寝具は慈濟から貰った一枚の毛布のみであった。毎日の食事は家から持って来た自家製のパイとトマトだけだった。

「タハニは私たちに会えて非常に喜んで、食事に招待したいと言いました。私

●シングルマザーのララ（中央）は7人の子供を育てた。慈濟ボランティアは彼女の子供たちが教育を受けられるようにと支援し続け、長期ケアしているこの家族と身内のように親しんでいる。

は『トマトだけでいい』と答えました。彼女は私に『毎日トマトを食べている』と答えました。その後、私は彼女をレストランに連れて行きました。彼女は最も安い一JDでサンドイッチを注文し、それを喜んで食べました。ずっと私に『本当においしいです!』と彼女は言いました。

「彼女の人生で、レストランで食事をするのはこれが初めてです」。あの情景に陳秋華の心が痛んでしまい、今なおこの思い出は記憶に新しい。「一度私たちはワデイ・フェナンにきましたが、洪水のため車は入ることができませんでし

た。そこで、ララは私たちに会うために食べ物を入れた二つの鍋を持って、五キロの道を歩いてきたのです」と陳秋華は言った

ララは焼きたてのパイを持ち出し、みんなをもてなした。このベドウィン族の砂漠グルメには「アーブーム」という独特の名前が付けられている。洗面器ほどの大きさのパイはみんなで分かち合うのに十分であった。もちろん、食材は百パーセント天然の物で無添加である。

この午後の紅茶はとても甘く、コーヒーはとても良い香りです。「アーブーム」は美味しかった。

水を引く配水管

伝説によると、かつてここは神が土地を約束した場所であり、ミルクが流れ蜂蜜のとれる場所と言われていた。だが貪欲な人間は環境を破壊して、母なる地球はもう耐えられなくなっている。遊牧民には温室効果を作り出す能力はないが、気候変動の影響を最初に負うのは彼らである。雨は降らず、地上では蜂に蜜を吸わせる花々が咲かない。

ララの家に別れを告げて、車は牛乳と蜂蜜のない干上がった谷を走った。山には水があるので水を引くこともできたの

だが、遊牧民は貧しく、勘定高い商人の考えも持っていなかった。それでやむなく先祖が谷に残した水路は史跡になるに任せたという。幸いに慈済が提供した長さ二キロの水道管で水源地から水を引くことができたので、やっと買わなくてもよくなった。

山道はでこぼこで、慈済によって建設された水道管は山肌に沿って一路前方に向かって曲がっている。そして水道管に沿って歩くと配付会場になっている学校に戻ってきた。天気はいつもながら暑いですが、水道管には水が流れていて、この水は砂漠の小川であり、水源地から愛と思



完璧な人はいない

傍目から見て完璧な人はいない。誠意で以って人に接し、愛で以って包容すべきである。

まっすぐな道心

◎文・釋徳仇／訳・濟運

上人は精舎の師匠たちにこう開示しました。「人と人は縁がなければ、知り合うことはなく、一堂に集まることもありません。団体の中で規律を守らない人を説得しても聞かない時は、ブツダが入滅する前に阿難尊者に答えた「黙擯」を思い出してください。慈悲で以



いやりを引いてくる。水道管が家も学校も經由しているので、子供たちは安心して学ぶことができるのだ

ララの子供のように、大学を卒業した後、故郷に戻って教員になる者もいる。慈濟奨学金があるため、ここでは多くの子供たちが教育を受けると、外に出て世界を探検する。運命を変えて砂漠に閉じ込められることなく、世間から忘れられることもないのだという。

（慈濟月刊六三三期より）

●荒野砂漠の生活は水資源が非常に少ない。夜には十分な電力がなく、子供たちはボロボロの靴を履いて熱砂の道を歩く。もしも教育が不足していれば、この苦境から抜け出すことはさらに困難である。

て規律を守らない人を包容すべきですが、説得しても聞かない時は勝手にさせるしかありません。ある日、縁が成就し、考え方を変えて正しい道に回帰するかもしれません。他人の不当な言動が自分に影響することで煩惱に絡まれてはならず、心の持ちようや言動は「いつも通り」でなければいけません」。

上人によれば、「正常な状態下では、団体に属する人は皆、行動を共にすることを望み、他人と打ち解けることができます。しかし、人にはそれぞれの習慣や個性があり、私も含めて誰一人、他人から見て完璧な人はいません。師匠であっても、全ての弟子の心身思いやることはできず、努めて精神理念を伝承し、皆がそれを吸収して活用し、またそれを伝承していくしかないのです」。

静思精舎は静思法脈の発祥地であり、常住修行者たちは法脈宗門

の静思綱領が揺るぎないものにしなければなりません。例えば縄を編んで要の結び目を作り、一つひとつの粽を縛った糸をそこに結んだ束を思い浮かべてください。ほどよく粽を縛った糸が一つの結び目になっているので、蒸し上がって運ぶ時も束ごと持ち上げればよく、一本一本の糸は容易に解れて絡まることはありません。その糸が一人ひとりの道心を表しているとすれば、粽の束はまるで全ての道心が同じ精神に回帰する姿のようです。その道心は、広くて真つ直ぐな菩提の道のように一人ひとりが守るべきものです。もし、無明や煩惱によって障害が出てくれば、他の人と同じ行動を取ることができません。

「師匠はあらゆる人に同じように誠意で接しているのですから、私たちがそういう態度で臨むべきです。他人の良くない言動を耳にし

た時でも誠意で以て接し、愛で包容すれば、この世に煩惱が増えることはありません」。

「見返りを求めず奉仕すると同時に感謝の気持ちを持つのは慈済人文精神の一つです。人助けは大きな喜びをもたらしますから、その機会があることに心から感謝すべきです。世の中では時には困難に遭遇して助けを必要とすることがあり、私たちがそれに応じて支援する時、感謝だけでなく、相手を尊重する態度で臨むべきで、施しを与える態度をとってはいけません。慈済の人間であれば、慈済人文精神を持っているはずですから、その精神は人との交流で表わさなければなりません。慈済の菩薩には慈悲心があり、民族や国籍、宗教に関係なく、平等な大愛で以て衆生に接することができるでしょう」。(慈済月刊六三五期より)

慈済大記事十一月……………

訳・済運

シンガポール、ベトナム、マレーシア、フィリピン、台湾などからの慈済人医会メンバーとボランティア、職員によって構成されたカンボジア治療・配付チームは、1日から3日までカンボジア・バツタンバン州立病院と病診連携先の病院で治療を行い、外科、内科、歯科、眼科、漢方科の医療奉仕をした。また、2日にはカンボジア総理府青年志願医師協会(TYDA)と共同でエクプノム中学校で治療を行い、3日間の延べ患者数は8276人に上った。そして、ポイペト市317傷痍軍人発展協会センターで600世帯の高齢者と傷痍軍人家庭に米と毛布を配付した。

1101

11・08	11・07	11・06	
<p>慈済日本支部は台風19号の被災地で支援活動を継続して行い、長野市ボランティアセンターからの依頼で、豊野町において250食分の炊き出しをすると共に、毛布や手袋、靴下、下着などの物資を用意した。</p>	<p>慈済基金会は617中国四川省宜賓地震支援活動で、珙県第一高校の支援建設に関する契約式典が行われ、王端正理事長が代表で調印した。</p>	<p>慈済基金会が建設する中国四川省涼山彝族自治州喜徳県冕山衛生院の契約式が成都市高新区グローバルセンターで行われ、王端正理事長が代表で出席して契約書を取り交わした。</p>	<p>◎慈済科技大学看護学部の教師と学生は「簡易式多機能安全注射器」を開発し、2019年第71回ドイツ・ニュールンベルグ国際発明展（IENA）で金賞に輝いた。</p>

11・03	11・02
<p>◎慈済はフィリピン・ミンダナオ島地震の被災地を支援するため、マキララで災害状況を視察すると共に、毛布と莫蔴、米、飲料水を配付した。その後、二手に別れてマグサイサイ町のサンパラ村とバナディ小学校に向かい、配付を行なった。</p>	<p>アメリカ・北カリフォルニア州の慈済ボランティアは2018年森林火災「キャンプファイア」の被災者慰問を継続して行い、山間部コンカウで毛布とジャケット、寝袋、ソーラー充電器と充電式ランタン及び50ドルの買い物券を89世帯に配付した。</p> <p>◎慈済インドネシア・バンドン連絡事務所では静思堂の除幕式が行われた。2014年5月16日に着工した静思堂は5階建てで敷地面積が3000㎡あり、ボランティアの活動拠点であると共に、地域向け教育講座が開かれる予定である。</p>

11・24	台湾、マレーシア、タイなどの職員とボランティアから構成された28人の慈済基金会ラオス水害配付先遣隊が、ラオス・バクセーに到着した。8月下旬に発生した水害の被災者を支援するための配付会場の視察と物資交換券の発行に関する説明会を開いた。
11・21	慈済基金会ヨルダン冬季配付チーム一行15人が、台湾からヨルダンに向けて出発した。9日間の日程で、現地の冬季配付活動を支援したほか、ボランティア養成講座を開き、歳末祝福会を催した。
11・18	国連環境署は18日から22日までタイ・バンコックの国連本部で、海洋ゴミと微細プラスチックに関する特設専門家による人員制限のない第3回会議を開き、効果のある対策と方法を討論する。慈済基金会はNGO観察員の身分で会議に参加し、タイ支部の職員・呂尚恩とマラッカ支部の職員・胡家健が代表で出席した。

11・12	西アフリカ・シエラレオネ共和国の水害被災者及び貧困者支援のため、慈済花蓮本部とアメリカ総支部から成る共同配付チームが首都フリータウンに到着した。14日からカリタスとヒーリー基金会、ランイ基金会などと合同で毛布や衣類、五穀粉などの物資を配付した。
11・10	フィリピン・ミンダナオ島は10月に3回にわたってマグニチュード6以上の地震に襲われ、1000世帯余りが住む家をなくした。慈済災害支援チームはマグサイサイ町とトゥルナン町で、米や毛布及び慰問金を2000世帯に配付した。
11・09	マレーシア・クアラルンプール慈済インターナショナルスクール慈誠懿徳会（慈済の学生を支援導くボランティアの会）の創立大会がクアラルンプール静思堂で開かれ、200人余りが出席した。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2019年12月18日発行・276号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・王麗雪

校閲 黒川章子

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



最高の笑顔 エコ毛布シリーズ

タイとミャンマーの国境地帯にあるバンタコラング学校の学生の大部分は、未だタイ国籍を得られていない、ミャンマーの貧困層カレン族である。厳冬を迎える前に、バンコクの慈済ボランティアが毛布を届けに行くと、防寒着に不自由していた子供達は笑顔を見せた。

(文、撮影・黄娟 タイ・ラーチャブリー県 2019.9.18)



慈済日本サイト



慈済ものがたり